



R.シュトラウス:

セレナード(ピアノ・ソロ版)

《13 管楽器のためのセレナード》作品 7 をシュトラウスが書いたのは 1882 年、18 歳の時だった。大指揮者ハンス・フォン・ビューローにも評価され、若きシュトラウスの出世作となった作品である。シュトラウスが作曲した器楽作品の《セレナード》は、後にも先にもこの 1 曲のみ。古典的なソナタ形式で書かれているが、アンダンテのみの単一楽章となっている。シュトラウス自身によってピアノ独奏版にも編曲された。心地よいロマン的楽想に満ちた曲である。

チェロ・ソナタより 第 3 楽章

チェロ・ソナタは、シュトラウスがミュンヘンの大学に入った頃、1882～83 年にかけて書かれた。全 3 楽章構成で、この第 3 楽章だけは第 1 稿から改訂されている。のちの豪華絢爛たるオペラ世界を予感させるような独自の魅力を秘めた作品で、劇的な盛り上がり、流れるように美しい旋律を堪能できる。

《もうひとりのティル・オイレンシュピーゲル》(ハーゼンエール編)

1894～95 年に書かれたシュトラウスの交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》は、14 世紀ドイツに実在した人物ティル・オイレンシュピーゲルの民話をもとにした作品。ハーゼンエールはこのオーケストラ作品を 5 種(ヴァイオリン、コントラバス、クラリネット、ファゴット、ホルン)の楽器編成の小品に仕立て直し、1957 年に出版した。編成も演奏時間も短縮されているが、原曲の魅力が十分に詰まった作品となっている。

歌曲

「万霊節」は、1885 年に書かれた《8 つの歌》作品 10 の第 8 曲。作品 10 には、オーストリアの詩人ヘルマン・フォン・ギルム『最後の木の葉』の詩に付曲した歌が集められて

いる。万霊節とは亡くなった信者のためのカトリックの祭日で、甘美な追想に満ちた名作である。「ツェチーリエ」は 1894 年、パウリーネとの結婚の前日に書かれた。《4 つの歌》作品 27 の第 2 曲。ハインリヒ・ハルトによる詩で、花嫁を優しく諭すような愛の歌である。「愛の神」は、1918 年に書かれた《クレメンス・ブレンターノの詩による 6 つの歌》作品 68 の第 5 曲。コロラトゥーラ・ソプラノのための非常に技巧的な曲で、愛の神キューピッドのきらめくばかりの炎が表現されている。「ダリア」は、作品 10(前出)の第 4 曲。黄色いダリアの花に恋情を託して語りかける。「献呈」は、同じく作品 10 の第 1 曲。タイトルはシュトラウス自身が付けた。「万霊節」とともに演奏機会の多い曲で、優美な旋律が心を打つ。「冬の夜」は 1884～86 年に書かれた曲を集めた《5 つの歌》作品 15 の第 2 曲。シャック伯爵の詩による。期待に胸をふくらませ、恋人のもとへ向かう冬の夜の道行を歌う。「なんと不幸な男だろう」は、1887～88 年にフェリックス・ダーンの詩に付曲した《素朴な歌》作品 21(全 5 曲)の第 4 曲。財産を持たない男の夢物語をユーモラスに描いている。「たそがれの夢」は、1894～95 年に書かれた《オットー・ユリウス・ビーアバウムの詩による 3 つの歌》作品 29 の第 1 曲。子守歌のように穏やかな夢に包まれた曲である。